

文語日誌(平成二十六年三月十七日)

明治・大正期には文語作文を書く模範たるべき名文を抄録したる書籍、數多出版せられたるも、その代表格の一は衆目の一致する所、「作文講話及文範」なり。芳賀矢一・杉谷代水の共著にて、富山房の出版なり。(手許にあるは大正十三年刊の縮刷版)

かつて獄中に居りし中野重治氏は本書を愛讀し、のちに「本とつきあふ法」にて以下の通り評したり。『そこにあるは人生の姿なり。ああ、學問と經驗とのある人が、材料を豊富にあつめ、手間をかけ、實用といふことにて心より親切に書きくれたる通俗本は何とよきものか』と。漱石、子規、蘆花、荷風、逍遙、頼山陽、國語讀本などよりの選りすぐりの此のアンソロジーを讀むに、汲めども盡きぬ豊穰なる内容にて、執筆當時の社會狀況をも活寫したる日本語の展覽會とこそいふべけれ。

文範冒頭の木下尚江氏による作文、「大學の卒業式」を見るに、『時は七月の十日、日はカンカンと照輝いて、朝から汗を絞る様だが、天は眞青に晴れ渡つて、見る目には又頗る快くもある』とありて、卒業式の時期、當時は春にあらずして夏なること判明す。『白髪の老侍従を陪乗せしめ給へる陛下の龍顔特に麗はしく、鹵簿愈々正門を入つて兩側の最敬禮を受けつつ、國樂を奏し始めた其嚟朗たる清き音波の傳はると均しく、門外觀衆の間には彼處にも此處にも期せずして萬歳の歡聲湧き上り』とあり、帝國大學の卒業式に天皇も參列せられたる様子なり。

徳富蘆花氏による作文、「天長節の食堂」にては、「清國人の何れ身分ある人物にや、緞子の服の美々しきが、一大皿を片手に、片手は、ナイフ、フォークを握りて、魚と云はず、片端より截りては載せ、截りては載せ、此處を先途と先づ貯へ給ひけるが、何れの武官にやそそくさ此方へ來らるる拍子に、清人の手にせし皿を斜めにし、鳥飛んで空にあり、魚牀に躍り、折角の赤筋入りたるズボンをあたらだいなしにて呆然とし給ひし此方には、件の清人惜しき事しつと云ひ顔に、慌てて牀の上なるものを匙もてすくひて皿に復へされたるなど、其國の氣風性癖も見えて面白かりし」など、夜會の様子をば眼前に活寫したるは興味深し。

永井荷風氏による作文、「川蒸氣」にては、「仲店の賑ひを外に見て、紅雨は大通を眞直に、吾妻橋の橋際から棧橋に繋がれた。ペンキ塗の川蒸氣船に乗り移たが、船は後れながら來て、切符を買ふ人の心を譯もなく周章てさせるばかりで、乗つて見ると實はなかなか出る様子もないのであつた」とあり、古き東京の街の風情を感ずることを得。

正岡子規氏による作文、「雲の日記」にては、「明治三十一年十一月十五日。朝晴れて障子を開く。赤ぼけたる小菊二もと三もと枯芒の下に霜を帯びて立てり。空青くして上野の森の上に白く薄き雲少しばかり流れたる心地よし。われ此雲を日和雲と名づく。午後雨雲やうやくひろがりて、日は雲の窓を照らす。散り残りたる餘所の黄葉淋しげに垣ごしにながめらる。」とあり、病牀の徒然に雲を見る子規に想ひを馳すべし。

大久保利通氏による作文、「駒場農學校開校の祝詞」にては、「茲に農學校建築竣を奏す。龍

駕忝く親臨し開校の典を擧げ給ふ。本校の光榮何を以て之に加へん。恭しく惟ふに、本邦の農業に於ける、未だ専ら其學を講ずるを聞かず。陛下聰明叡哲農學の急務なることを知しめし給ひ、この校を創建し、博く萬國の實驗に徴し、精く庶物の性質を究め、大に富民殖産の道を興隆せしめ給ふは、實に生民の大幸にして、國家の洪福と謂ふべきなり。臣利通謹んで盛旨を奉じ敢て其事に従ふ。豈感激匪勉さるべけんや。ああ我邦の農事をして駸々乎として日に開け月に進み、物産は益繁殖に赴き、民生は益富饒に至らしめんことは、其れ今日より始まらん。明治十年一月四日内務卿大久保利通謹んで祝詞を奏す。」とあり、大久保の實際に挨拶したる内容なれば、氣魄を感じしむ。

なほ、講談社學術文庫には復刻版の「作文講話及文範」あれど、實は後半の「文範」部分は一切抜け落ち、前半の「作文講話」部分のみなれば、注意を要す。従つて戦前版の古書を需めざるべからず。